

地域の医療法人と連携する家庭科の授業作り

— 高齢者の介護に関する学習を中心に —

八幡(谷口)彩子*・川村七海**

A Home Economics Lesson Plan in Collaboration with Medical Corporation in Kumamoto: a focus on learning about elderly care

Ayako YAHATA-TANIGUCHI and Nanami KAWAMURA

(Received October 27, 2022)

Abstract

The manpower shortage has become increasingly problematic in the elderly care sector in Japan due to further aging of society. The subject of elderly care is increasingly added into home economics education in Japan as a result of this issue.

In this paper, we suggest a home economics lesson plan in cooperation with Jinseikai Akatombo Medical Corporation (the name means “red dragonfly”), the aim of which is to promote networking medical and nursing care rooted in the community.

Medical Corporation Jinseikai Akatombo offers an elderly care program incorporating ICT, AI and nursing care robots, along with a team of multi-professional medical personnel, the purpose of which is to support family care and respond to each elderly person’s needs. It also includes worship services, social welfare classes, and junior volunteers to facilitate communication with and between students and the elderly.

We also managed a junior high school curriculum, linking home economics lessons with other subjects and designing home economics lesson plans, to include Jinseikai Akatombo Medical Corporation.

Key words : Medical Corporation Jinseikai Akatombo, home economics lesson plan, learning about elderly care, curriculum.

1. 研究目的

現在、わが国では高齢化が進んでいる。2019年の高齢化率は28.4%、65歳以上人口1人を支える15～64歳人口は2.1人であるが、今後さらに減少することが予測されている。とくに、高齢者の介護は切実な問題である。内閣府『平成30年度版高齢社会白書』によれば、40歳以上の男女に、「どこでどのような介護を受けたいか」について尋ねた結果、「家族に依存せずに生活できるような介護サービスがあれば自宅で介護を受けたい」「自宅で家族中心に介護を受けたい」「自宅で家族の介護と外部の介護サービスを組み合わせて介護を受けたい」が7割以上を

占め、自宅で介護を希望する意見が多かったが、介護の担い手不足が深刻化している。

こうした状況を背景に、平成29年告示『中学校学習指導要領』では、技術・家庭（家庭分野）において、高齢者との交流と人とよりよく関わる力を育成するための学習活動の充実が目指され、「高齢者など地域の人々と協働することに関する内容」が新設された。また、平成30年告示『高等学校学習指導要領』では、高齢化の進展に対応して、家庭科における高齢者の尊厳と介護に関する内容や高齢者の心身の状況に応じた生活支援に関する技能等の内容の充実が図られた。「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、魅力的な地域題材や地域の問題解決を学校教育や授業作りに活用する動きもみられる。高齢者に関する学習が重視される中、地域の高齢者施設と連携した家庭科の授業開発を行いたいと考えた。

* 熊本大学大学院教育学研究科

** 鹿児島県社会福祉事業団母子生活支援施設

本研究の目的は、熊本県内で介護サービスを提供している医療法人社団仁誠会赤とんぼの地域貢献活動に着目し、同施設と連携した家庭科の授業作りを行うことである。

2. 研究方法

上記の研究目的を達成するために、以下の方法により研究を進める。

- 1) 医療法人社団仁誠会赤とんぼが取り組んでいる以下のような取り組みについて、同施設職員に聞き取り調査を行う。
 - ①小中学生向けの活動
 - ②家族への支援活動
 - ③入所者・利用者への支援
 - ④講話や勉強会等の地域活動
 - ⑤スタッフの介護力向上のための取り組み
 - ⑥学生に伝えたいこと
 - ⑦AI や ICT を活用した最先端の福祉
- 2) 上記1) の聞き取り調査をもとに、小・中・高等学校との連携の仕方や家庭科の授業に導入する方法について検討する。

3. 結果と考察

1) 医療法人社団仁誠会について

医療法人社団仁誠会は、1981年に設立された熊本黒髪内科医院を前身とし、熊本県内に5つのクリニック、介護老人保健施設や通所リハビリテーションなど10の介護サービス事業所を有している。もともと人工透析を中心とする診療やサポートを行っていたが、患者の高齢化や合併症に伴う介護の必要性の高まりなどへの対応から、地域の高齢者のために介護サービスの提供を始めた。

医療法人社団仁誠会のうち、介護サービスを提供する赤とんぼでは、一人一人の個性を尊重した支援、最先端のICT、AI、介護ロボットの導入、プライマリー制度を導入したチームケア、ダイバーショナルセラピーによる活動などに取り組んでいる。

2) 医療法人社団仁誠会赤とんぼ職員への聞き取り調査

聞き取り調査の概要は以下の通り。

日時：2021年10月28日 午後13時～14時30分

場所：医療法人社団仁誠会 介護老人保健施設ケアセンター赤とんぼ（熊本市東区戸島西2丁目3-10）

対象者：同施設 介護統括本部長 東健一氏
以下、各項目に関する聞き取りの概要を記す。

①小中学生向けの活動

小学校の道徳の時間を使って、施設の見学に来てお年寄りのことを聞いたりする授業があるときに、小学校から依頼があったりして受け入れ、「高齢者とは」等の話をしている。スライドで施設の紹介をしたり、高齢者の特徴、認知症について触れたりしている。

「福祉学級」では、高齢者の怪我しやすいところはどこか、高齢者を見かけたらどういう声掛けをするか、ここはどういう施設か、けがをしないために運動をしたりリハビリをしたりする施設だということ話している。但し、「福祉学級」の中で体験活動はあまりない。通所の利用者と話したり、舞台上で歌を歌ったりする。また、リハビリの様子やフロア全体を見学したり、パワーリハビリテーションの体験をする。

ジュニアボランティアについては、小学校で体験してみたい人を募り、年に1度、多い時は10人ほどを夏休みや休日に受け入れている。活動の内容は、小学校と地域の方、施設が連携して、希望者に施設の1日体験をしてもらう。福祉に興味がある小学生のため、福祉学級とは異なる内容で、車いすの体験をしたり、食事を一緒にしたり、福祉車両の紹介をしたり、リハビリに参加したりしている。

②家族への支援活動

高齢者の家庭復帰を目指す家族への介護力支援については、家族が面会に来られるたびに情報の共有を行い、多職種を含めた面談を3か月に1回行っている。その中でそれぞれの職種から、今の状態や家に帰ったらこうしたほうが良いというアドバイスを伝えている。

自宅に帰る前の家族に対しては、面会に来られた際に、在宅での介助方法を一通り一緒に行ったり、福祉用具の提案などを行っている。また、家を訪問して手すりの位置やトイレの向きなど、リハの専門職からのアドバイスを共有する場面もある。家族が介助できない場合は、居宅・訪問介護・訪問リハ等と連携を取ってサービスを入れられるようにしている。認知症の方の家族には、認知症の勉強会や理解してもらうために面談を行い、様々な情報共有を行っている。

在宅介護を受けている方、通所者のご家族への支援は入所者への支援とほとんど共通だが、もともと家から通われている方は、各家庭でのスタイルを崩

してはいけないと思っている。家庭でのやり方と施設でのやり方が異なると混乱させしまうので、家族と情報を共有しながら家庭と同じようなサービスを提供するようにしている。

家族への支援で心掛けていることとしては、何か変化があった時に的確に情報を伝えることと連携を一番大切にしている。家族は毎日来所されるわけではないので、信頼関係ができていないと家族にも不安が募ってしまう。何か変化があった時にはすぐに連絡して、連携を持つことで信頼につながっている。

③入所者・利用者への支援について

楽しみの支援として、熊本で唯一、同施設で導入されているダイバーショナルセラピーは、オーストラリアのセラピーの一つで、「老いることは耐えることではない、楽しむことである」という考え方のもと、人として当たり前を楽しんでもらう、人生を楽しんでもらうためにはどうしたらよいかを考えること。楽しみがある生活を送ってもらうために導入した。ダイバーショナルセラピーには、チョイス・ライフスタイルなどのキーワードがある。高齢者の選択する自由を大事にしたり、以前の生活スタイルに沿ったものを提供するようにしている。

ダイバーショナルセラピーによる効果としては、利用者の楽しさ、感動が数倍違う。活動にしても、リアルなことを求めているため、やりたいことができ、感動できる。コロナ禍で外出ができないからうちでできることをしましよとなることが、もっと今までやっていたことをリアルに体験できるように展開できる知識が増えた。

ダイバーショナルセラピーを導入してから、高齢者も生き生きしていると思う。相手の立場に立って考えることはとても大事で、自分の好きなものを選べるというだけでも、ここでの生活が少しでも楽しくなると考える。

趣味の講座として約50種、月に約70の講座を開催している。1日約3講座を開催しており、ボランティアの方が行っている。ボランティアは、もともと団体に活動していた人、昔先生をしていた人、家族などにボランティアの登録をしてもらい、1度開催してもらおう。そのうち参加者から評判が良かった場合、定期的に来てもらうようにしている。コロナ禍により開催できていないが、趣味の講座の時間に職員ができることを披露したり、フロアごとにレクレーションをしたり、体操をしたりする時間になっている。

プライマリー制度を導入し、1人の職員が3人を担当している。利点としては、利用者さんへの責任が出てくるので、その方に応じたニーズに沿ったサー

ビスの提供ができること、3人を特に注意してみているので、変化を観ながら他の人への発信ができることが挙げられる。

また、利用者一人に対して介護職1人、管理栄養士1人、理学療法士1人、看護師一人など、チームでサービスを提供している。利用者さんの状況によっては、専門職の担当を増やすことで対応している。毎週チームでの会議を行っており、利用者5人ずつを評価している。5人以外で特に問題がある方や変化があった方については、適宜追加しながら臨機応変にカンファレンスをしている。

④講話や勉強会等の地域活動について

地域に根差した施設を目指しており、介護老人保健施設は自宅に帰る中間施設ということで、高齢者が施設に入ってリハビリをし、自宅に帰るという目的で建てられている施設なので、高齢者を元気にして、自宅に帰るのが一番の目的となる。地域との関係については、地域との連携、情報共有という点で、地域から信頼され、一緒に地域を盛り上げるように取り組んでいる。

地域に根差した施設を目指して、「健康講話」や「オレンジカフェ & 講話」を開催しており、施設の建物内で毎月行っていた。毎月行うようになったのは5、6年前からだ。それまでも2か月に1回程度このような活動を行っていた。しかしコロナ禍以降開催できていない。

講話の内容は、仁誠会には多職種がいるので、専門職がそれぞれの専門から講話をしたり、オレンジカフェは在宅で認知症を抱える家族の寄り場になるので、お茶をしながら相談に乗ったり認知症の講話をしたりしていた。

講話の内容は、地域支援チームの委員会で年間行事を作り、内容を決める。内容は、地域にどんな話をしてほしいか等のアンケートを行い、それに沿って決めている。

これらの活動の目的は、仁誠会には多職種の職員がいるので、今職員が持っている知識を少しでも在宅で家族、地域の方々が生かせるようにと思い、取り組んでいる。現代では、健康寿命をどれだけ伸ばすかという予防が大切になってきている。そのためにも自宅で予防して介護が必要にならないように活動している。

出前講座については、地域の民生委員が中心となって、町内で生き生きサロンを開催している。民生委員がそれぞれ近くの施設と連携を取って、月ごとにどこにお願いするかという年間計画を立てている。何月にどの町内に行くかという計画が出されるので、

その地域が何をしてほしいかということをはじめに聞いて、それぞれのニーズに沿って出前講座を行っている。頻度としては、月に3つの町内で講座を行っていた。場所は民生委員が公民館を借りて地域の高齢者に集まってもらって運動やお話をしている。

勉強会については、出前講座の内容に併せて独自で認知症のオレンジリング（地域で認知症を支える認知症サポーター）の講座を開いたりしていた。今ニーズが多いのは、予防的な運動などの要望が多いので、町内から要望があったり仁誠会から運動指導員が行って予防運動をやったりしていた。仁誠会に来てもらって、毎日予防のためのトレーニングをしたこともあった。様々なニーズに沿った内容で行っている。

自治会や社会福祉協議会等地域の方々と協力して、回覧板で周知し、誰でも参加できるようにしている。

⑤スタッフの介護力向上のための取り組みについて

介護スタッフの介護力向上のための取り組みとしては、赤とんぼでは、ラダー制度（階段状の教育システム）を導入している。ラダー制度の概要は以下の通り。

- ラダー0 新しい職員はここからスタート
- ラダー1 指導を受けながらできる職員
- ラダー2 自分ですべてできる
- ラダー3 後輩の指導ができる 等

ラダー制度には専門コースと管理コースがあり、専門コースの途中から管理コースに行くことができる。一段階上がるために年間研修を行う。研修を行いながら一つ上の段階まで達していると自分で判断した場合、申し出ると評価会で検討され、上がることができ、年齢などに関係なく、頑張った分の評価を得ることができる。

⑥高齢者の介護について伝えたいことや求めること

小中学生・高校生・大学生に、高齢者の介護について伝えたいことや求めることとしては、介護の人材不足が深刻になっているし、介護の仕事って大変というイメージがあるかもしれないが、様々なシステムができてよくなって給与体系も上がってきており、やりがいのある仕事なので、どんどんこの業界に入ってほしい。

一緒に生活をするので、一緒に楽しむことが一番大切である。介護は利用者ができないところの世話をすることが仕事ととらえられることが多いが、介護は自立支援なのでできないところをできるように

サポートする・介助する、できるところは見守ってあげるといのが当たり前のスタイルだということを知ってほしい。

介護職に就いて一番戸惑ったことは、実際に利用者との対応にあたって、学校で習うこと、理想と現実とのギャップがあること。理想と現実は違うけど、理想に近づけるためにどうするかを考えるのが介護の仕事なので、そこにいかに私たちが焦点を合わせていくかを念頭に置いておくと良い。

⑦AIやICTを活用した最先端の福祉について

ICTの活用については、コロナ禍になる前からいち早くペーパーレスにしていって、記録は基本的にパソコンで行っている。メリットとしては、データ分析を自動で行ったり、体温や血圧を測って手書きで記録していたものもブルートゥースでパソコンに飛ばすなどができるので、利用者に関わる時間が増えた。時間の短縮ができたことにより、7.5時間労働も実現することができた。コロナ禍で家族面会を中止しているが、いち早くICTを導入していたため、ZOOMでの面会をスムーズに実施することができた。AIについては音声入力としてAIを使っている。音声入力の福祉のためのソフトを用いて、普通の端末では出にくい専門用語の漢字が出るようになり、それを覚えさせることもできる。

介護ロボットについては、いろいろなものを導入しているが、移乗用リフトが今主に使っている介護ロボットである。職員の負担軽減に最も効果があった。介護をするにあたって腰痛が一番の問題点だった。

3) 小中高等学校におけるカリキュラムの検討

上記の調査における医療法人社団仁誠会赤とんぼの取り組みをもとに、小中高等学校において、高齢者の介護に関する学習を導入する方法を検討した。

中学校や高等学校の家庭科では、高齢者の介護に関する学習が位置づけられているが、それ以外にも社会科や道徳、特別活動などで高齢者に関する学習が行われている。特に中学校では、社会、道徳、ナイスライ、キャリア教育等と、家庭科を関連付けた学習が幅広く展開できると考えた。小中高等学校における家庭科と他教科等と連携したカリキュラム案を表1に示す。

中学1年では家族・家庭や地域との関わりを学び、合わせて「社会」で少子高齢化について学ぶ。この時、地域活動への参加を促し、高齢者との関わりを機会を増やしておく。中学2年では、高齢者の学習の導入として地域の高齢者施設の見学や交流を行うことで、学習への意欲を高め、技術・家庭（家

表1. 小中高等学校における家庭科と他教科等と連携したカリキュラム案

	小学校	中学1年	中学2年	中学3年	高等学校
家庭科	A(1)自分の成長と家族・家庭生活 A(4)家族や地域の人々との関わり	A(1)私たちの生活と家族・家庭の機能／家庭生活と地域との関わり	A(3)家族や地域の高齢者との関わり	B(6)家族に合わせた住まい方の工夫	家庭基礎 生活支援に関する基礎的な技能／ライフステージに応じた衣食住の特徴 家庭総合 介護者と当事者双方に負担の少ない介護方法や心身の特徴に応じた生活支援に関する技能／ライフステージに応じた衣食住の特徴や課題
社会	(3)ア(ア)安全なくらしとまちづくり	地理C(2)ア(イ)少子高齢化の現状と課題	地理C(4)イ地域の実態や課題解決に向けた取組		
道徳	家族や高齢者への尊厳と感謝	思いやりの心・家族への感謝		家族愛、家庭生活の充実	
特別活動	地域の高齢者との交流	地域活動への参加	地域の高齢者施設の見学・高齢者とのふれあい		地域の高齢者に向けて調理したものを持って行き、高齢者と関わる／公民館などを見に行き、高齢者も使いやすく改善点を見つける
ナイストライ			職業体験・体験の共有		
キャリア教育				自分の好きなこと・やりたいこと・興味があること等のマップ作成	多くの職種の方から職業について講話を聞き、将来設計

庭分野)の学習で高齢者疑似体験や介助体験を行うことで理解を深める。また、「社会」では、地域の結びつきについて学ぶことで、地域との連携の大切さを学ぶことができると考える。「ナイストライ」では、高齢者施設に行く生徒もいるため、そこでの体験をクラスで共有する。こうした高齢者に関する学習を活かし、中学3年の家庭分野では、家族に合わせた住まい方の工夫を学ぶ。また、高齢者施設での活動なども参考にしながら、キャリア教育も行う。

4) 中学校技術・家庭(家庭分野)の授業作り

つぎに、医療法人社団仁誠会赤とんぼの取り組み等を活用した中学校技術・家庭(家庭分野)及び高等学校家庭科の授業プランを検討した。なお、本稿では、紙面の都合上、中学校技術・家庭(家庭分野)第3学年の高齢者がいる家族における住まい方の工夫に関する授業作りについて取り上げる。開発した学習指導案のうち、「本時の授業」を表2、授業で生徒が取り組むロールプレイのシナリオ、参考資料を資料1に示す。これらのロールプレイのシナリオは、施設職員からの聞き取り調査をもとに開発した教材である。また、紙面の都合で、本稿では紹介できなかった高等学校の授業では、施設への訪問・

見学を通して、地域の医療法人の取組への理解や生活設計・高齢者介護に資する内容となることを目指した。

4. まとめ

医療法人社団仁誠会は、地域に根差した医療と介護のネットワークづくりを推進している。医療法人社団仁誠会赤とんぼでは介護サービスを提供しており、介護老人保健施設、通所リハビリテーション等の事業を行っている。その中で、ICTやAI、介護ロボットを導入した最先端の福祉、多職種(看護師・介護士・理学療法士・管理栄養士・歯科医師・ケアマネジャー・相談員など)が連携し、家族の介護力への支援や利用者一人一人に合った介護サービスの提供等、チームで介護支援を行っている。

また、「地域に根差した施設」を目指し、勉強会や小学校の福祉学級受け入れ、ジュニアボランティアの受け入れ等、普段高齢者と関わる機会が少ない子どもたちが、高齢者との関わりや介護について学ぶ活動を行っている。

こうした活動は、学校教育の中で活用できることが多くあると考えた。そこで、本研究では、他教科

表 2. 中学校技術・家庭（家庭分野）学習指導案の「本時の学習」

(1) 本時の目標

◎地域の施設職員と連携して高齢者を支える住環境を工夫しよう。

(2) 学習活動と評価

過程	生徒の学習活動	授業の形態	教師の指導・支援	備考
導入	1. 家庭内にはたくさんの危険があることを知る。 2. 高齢者の体の特徴についての復習をする。	一斉 個人	○家庭内事故と交通事故の死者数の表を見て、特に幼児や高齢者は家庭内事故死の危険性の方が高まっていることに気付かせる。 ○高齢者との関わりに関する学習の時に使用したワークシートなどを用いて簡単に高齢者の体の特徴等を復習する。	グラフ ワークシート
めあて 家庭内事故について理解し、高齢者と暮らす安心安全な住環境を考えよう。				
展開	3. 教科書の間取りを見て、高齢者と暮らす家族の視点から、危険な点はどこか考える。 4. 住環境を改善するロールプレイを行う。 5. ロールプレイングをしてみ、教科書の間取りの中で改善できるところと改善方法をまとめる。 6. ユニバーサルデザインについて理解する。	ペア 個人 一斉	○ここでは、福祉職員の方と連携しながら、高齢者の暮らしを支えていくという認識を持つことができるようにしたい。 ○高齢者のために考えた工夫は、バリアフリーであり、さらに誰もが暮らしやすい住まいなので、ユニバーサルデザインにもなることに気付かせる。	ワークシート ロールプレイング（シナリオ）
まとめ	6. 本時の振り返りを行い、感想を記入する。	個人	○ロールプレイをした感想や自分の家の中で改善できることをまとめる。	ワークシート

(3) 評価

- ・家庭内事故や住まいのバリアフリー等について理解している。
- ・家庭内の事故防止について考えることができる。
- ・高齢者と共に暮らすときの工夫について考えることができる。
- ・住まい方についての課題を見つけ、解決に向けて取り組んでいる。

や特別活動などと関連づけたカリキュラムを検討し、中学校技術・家庭（家庭分野）と高等学校家庭総合の授業プランを提案した。具体的な内容としては、施設の見学や家族・家庭への支援をロールプレイで体験したりすることで、介護は様々な人と協力して行うことが大切であり、生徒自身が将来高齢者を支えることができるような授業作りを目指した。

現在、高齢化が進み、介護の担い手不足が指摘される中、生徒には、家庭科等の授業を通して、高齢者や介護について興味関心を持ち、積極的に関わることができるようになってほしいと切に願う。

謝 辞

研究にあたり、資料を提供いただいた医療法人社団仁誠会赤とんぼの皆様、聞き取り調査にご協力いただいた東健一様に深く感謝いたします。

おもな参考文献・ホームページ

河村美穂, 小高さはみ, 伊藤葉子, 鶴田敦子 (2003) 「家庭科教育における福祉教育実践の方向性」『日本家庭科教育学会誌』第46巻第3号, pp.234-244





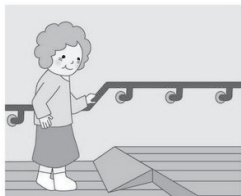

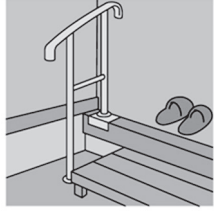

高橋久美子, 貴志倫子, 奥村美代子, 林田真由美 (2011) 「学

資料1. 授業で使用するロールプレイのシナリオと参考資料

(シナリオ)

家族	家の中で、立ったり座ったりするのが大変になっているんです。
職員	そうですね。特に大変そうで不安なのはどこですか。
家族	そうですね、普段は机を支えにしているから大丈夫なんですけど、トイレやお風呂のとき大変そうです。
職員	では、まずトイレから見ていきますね。
家族	よろしくお願いします。
職員	立ったり座ったりするのが大変な時は、壁にI型の手すりを付けておくと立ち上がりやすくなりますよ。
家族	確かに、手すりがあれば支えにして立ち上がるのも楽にできそうですね。でも、壁に設置するのはなかなか大変じゃないですか？
職員	そうですね、取り付けに費用や時間は必要ですが、固定できるので安定して支えてくれるんですよ。設置が簡単なものでは、置くタイプもあるんですよ。
家族	そうなんです！それだと設置も簡単ですね。
職員	置くタイプだと、家庭のトイレや利用者の使いやすさによって、高さや幅などのサイズ調節ができるので、簡単に設置できますよ。
家族	そうですね。それに、ひじ掛けのようにになっているから、両手で体を支えられて安心ですね。
職員	I型と置くタイプ、どちらを取り付けるかは、利用者さんとお話をして、使いやすいほうにしてあげてください。
家族	分かりました、ありがとうございます。
職員	では次に、お風呂を見てみましょう。
家族	お風呂は、立ったり座ったりだけでなく、転んでしまわないか心配です。
職員	そうですね。まず、お風呂のイスなんですけど、ひじ掛けの部分がついたシャワーチェアというものがあるんですよ。
家族	なるほど。今使っているイスだと、支えがなくて立ったり座ったりするのが大変そうだったので、シャワーチェアの方が楽になりそうですね。
職員	高さが調整できるものもありますから、利用者さんに合ったものを選んでみてくださいね。
家族	はい、ありがとうございます！
職員	あとは、転んでしまわないか心配なんですよね。
家族	そうですね、浴槽をまたぐときにしっかりと掴んで支えになるものがあれば良いんですが。
職員	そういうときには、浴槽用手すりというものがありますよ。これは浴槽の縁に挟んで固定するので、付けるのも簡単ですよ。
家族	なるほど、こういう手すりがあるだけで、支えができて安心ですね。ありがとうございます！
職員	他に家の中で気になるところはありますか？
家族	そうですね、最近よく小さな段差でつまづくことが多い気がします。
職員	足を上げづらくなっていますからね。例えばどこでつまづいていますか？
家族	和室をよく使うので、リビングと和室の間の段差が多いですね。
職員	なるほど、それではここに段差解消スロープを付けるとよさそうですね。
家族	スロープを付けるのは大変じゃないですか？
職員	部屋の間の小さな段差なら、置くだけの小さなスロープがあるんですよ。
家族	そうなんです！他のところも小さな段差はたくさんあるんですが、全部付けた方がいいですか？
職員	今は足を上げづらくなってきているので、足を上げる練習をしておいた方が、つまずきの予防にもなるので良いと思うんですね。
家族	確かに、それならまずは和室とリビングの間の段差につけてみますね。
職員	あと、玄関の段差は大きいですが、大変そうではないですか？
家族	玄関は、つかむところもなくいつも大変そうなので、私が支えてあげています。手すりもどこにつけたら良いか分からなくて。
職員	そうですね、ここは段差が大きいし手すりを取り付ける場所もないので、踏み台付きの手すりを置くと良いと思います。
家族	それは簡単に設置できますか？
職員	はい、置くだけのものもあるので、簡単にできますよ。
家族	そうなんです！
職員	こういうもので工夫をして、自分で昇り降りができるようにしておくと、体が悪くなる予防にもなるので、設置してみてください。
家族	そうですね、取り付けてみようと思います！ありがとうございました。

(参考資料)

トイレ		(1) 
浴室	(2) 	(2) 
小さな段差	(3) 	(4) 
大きな段差	(5) 	(4) 

(1) 引用： [08dd690066524658cb74bebf6d5264ed.jpg \(640×850\) \(sozailab.jp\)](https://www.sozailab.jp)

(2) 引用： [浴室で使用する福祉用具 | 介護用品の通販・販売店【品揃え日本最大級】 - 快適空間スクリオ \(scrio.co.jp\)](https://www.scrio.co.jp)

(3) 引用： [lead_image.jpg \(400×270\) \(storage.googleapis.com\)](https://storage.googleapis.com/lead_image.jpg)

(4) 引用： [住宅改修で改善する生活の中での問題点 | 介護用品の通販・販売店【品揃え日本最大級】 - 快適空間スクリオ \(scrio.co.jp\)](https://www.scrio.co.jp)

(5) 引用： [015-genkan.gif \(500×501\) \(tukikage.net\)](https://www.tukikage.net)

校家庭クラブを活用した高校家庭科の介護実習授業」

『日本教科教育学会誌』第34巻第2号, pp.51-59

二橋拓哉 (2019) 「中学校家庭科における高齢者学習の変遷と今後の課題」『日本家庭科教育学会誌』第61巻第4号, pp.215-224

文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 家庭編』東洋館出版社

文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 技術・家庭編』開隆堂

文部科学省 (2018) 『中学校学習指導要領 (平成29年告示)

解説 社会編』東洋館出版社

文部科学省 (2020) 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)

解説 家庭編』教育図書

医療法人社団仁誠会ホームページ

(<https://www.jinseikai.or.jp/about>) 2022年1月閲覧

医療法人社団仁誠会赤とんぼホームページ

(<https://www.jinseikai.or.jp/care>) 2022年1月閲覧

内閣府『平成30年度版高齢社会白書』

([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/gaiyou/pdf/1s2s_02.pdf)

2018/gaiyou/pdf/1s2s_02.pdf) 2022年1月閲覧